

第1編

経済学・経済政策の全体像

序章 経済学・経済政策の全体像

Chapter1 経済学・経済政策 試験の内容

1.本試験の内容

- 100点満点(25問)
- ・マクロ経済学10問～12問
- ・ミクロ経済学10問～12問
- ・それ以外(データの読み取り問題、時事問題、財政学など)1～4問程度

Chapter2 経済学とは

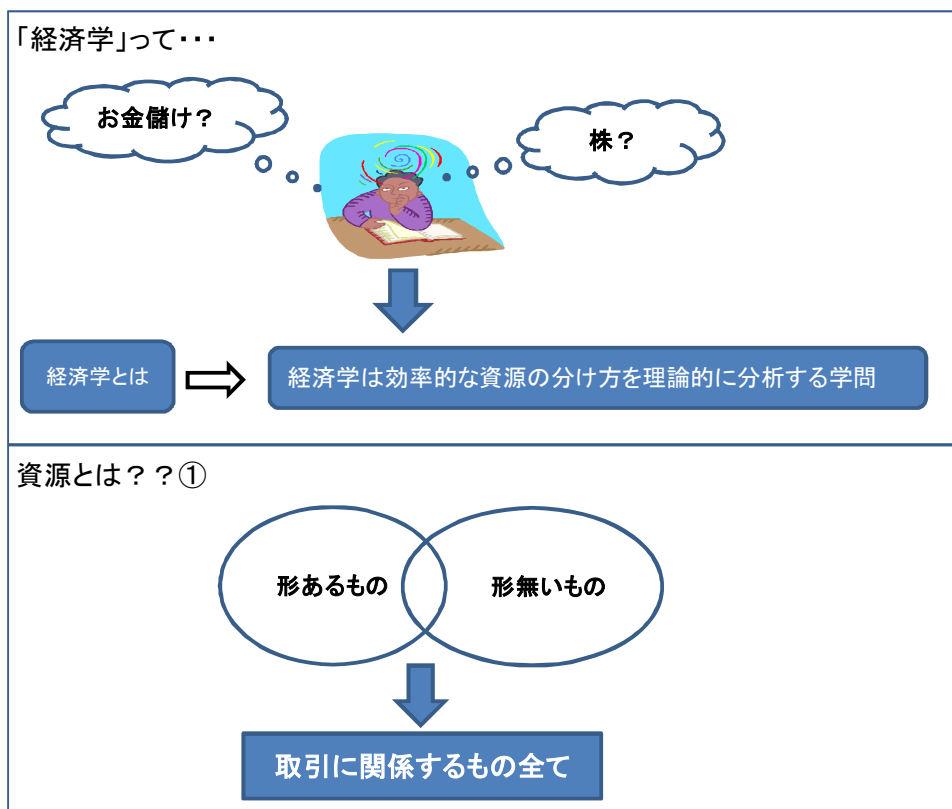
まず、詳しい経済学の内容に入っていく前に、経済学とはどのような学問なのか概略を説明し、全体像を把握していきます。

1.経済学とは

経済学とは、世の中にある「資源の分け方」について理論的に分析をする学問です。

一般的に「資源」というと、石油や木材など「原料」が思い浮かぶと思いますが、経済学でいう「資源」とはその他にも「お金」「出来上がった商品」「労働力」「時間」など、取引に関係するものを全て「資源」と考えます。その資源をどうすれば効率的に分けることができるか、また、「最も効率的な分け方」とはどのような状態なのか、を経済学で考えていきます。

例えば、「お金という資源をどの割合でリンゴとミカンに振り分ければ、消費者が一番満足できるか」や「どれだけの労働力でどれだけの時間働いたら一番効率的に生産できるか」等について、分析するのが経済学なのです。



資源とは??②

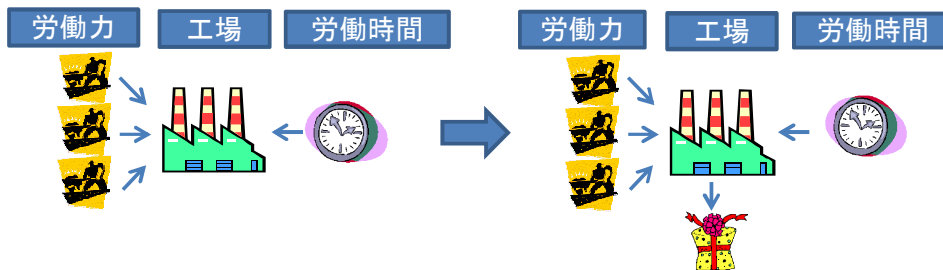
お金という資源を使って・・・



リンゴとミカンを何個ずつ買ったら自分が一番満足できるか？

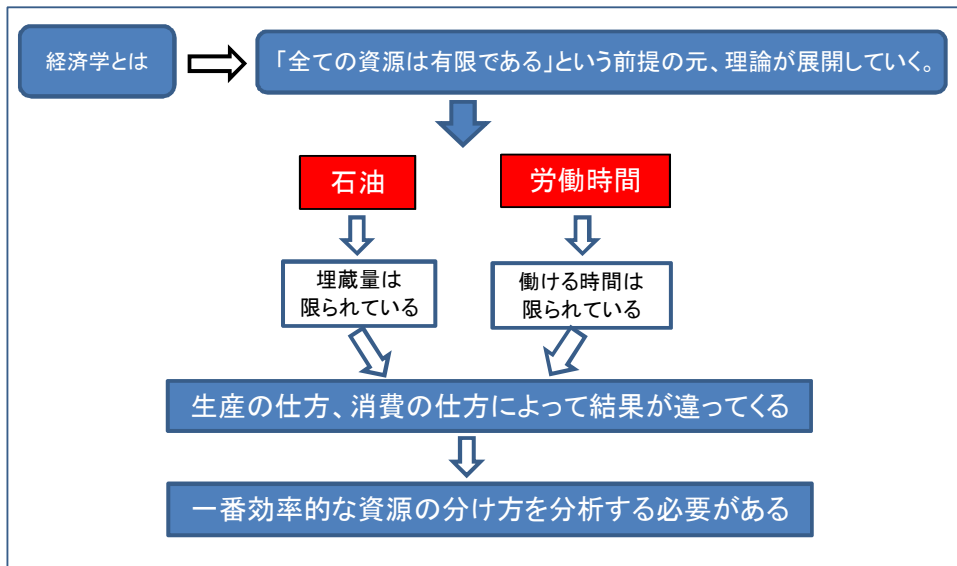
資源とは??③

労働力・労働時間という資源を使って・・・



どれだけの労働力でどれだけ働けば一番効率的に生産できるか？

経済学を理解する上でもう一つ重要なことがあります。それは「全ての資源は有限である」という考え方です。資源が有限であるということは、資源の生産の仕方、消費の仕方によって、結果が違ってきます。経済学では、ベストな結果を得る為には、どのようにその限られた資源を活用すべきかについて分析していきます。

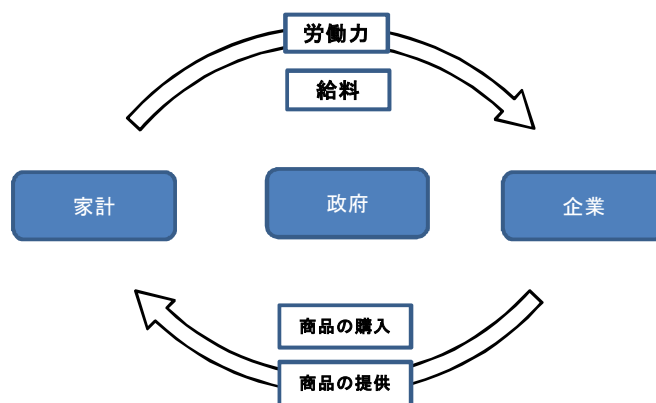


2.経済学の重要論点

ここでは、中小企業診断士試験における経済学の重要論点について、把握していきます。

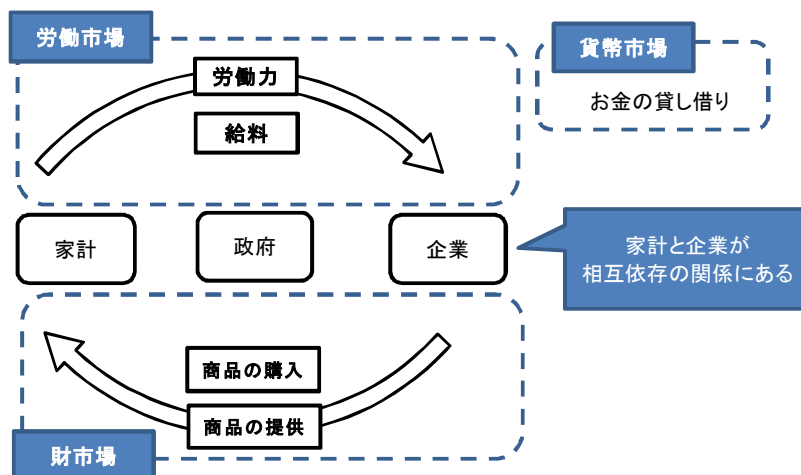
①3つの登場主体

経済学に登場する主体は、「家計」「企業」「政府」の3つです。3つの関係は下の図のように表され、ミクロ経済では、主に「家計」と「企業」の動きや関係を捉えて分析したもので、これに対して、マクロ経済は主に「政府」の役割を重視した経済学です。



②3つの市場

経済学では、「家計」と「企業」が集まって取引を行う場所のことを「市場」と言います。大きく「財市場」「労働市場」「貨幣市場」の3つに分かれ、下の図のように表されます。



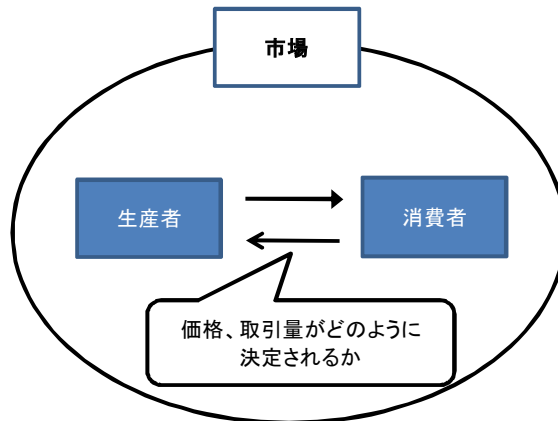
財市場 :一般的な商品が取引される場所。家計が買い手、企業が売り手となる。

労働市場 :働きたい人と、雇いたい人が集まって、誰が誰をいくら給料で雇うか決める場所。家計が売り手、企業が買い手となる。

貨幣市場 :お金を取引する(お金の貸し借りをを行う)場所。「企業が銀行や投資家からお金を借りて、利子や配当をつけて返す」という取り引きが行われる。

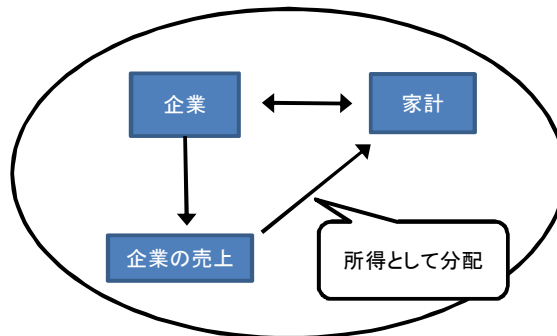
③ミクロ経済学

ミクロ経済学とは、一つのマーケットの中である財の価格と取引量がどのように決定されるかを考える学問です。



④マクロ経済学

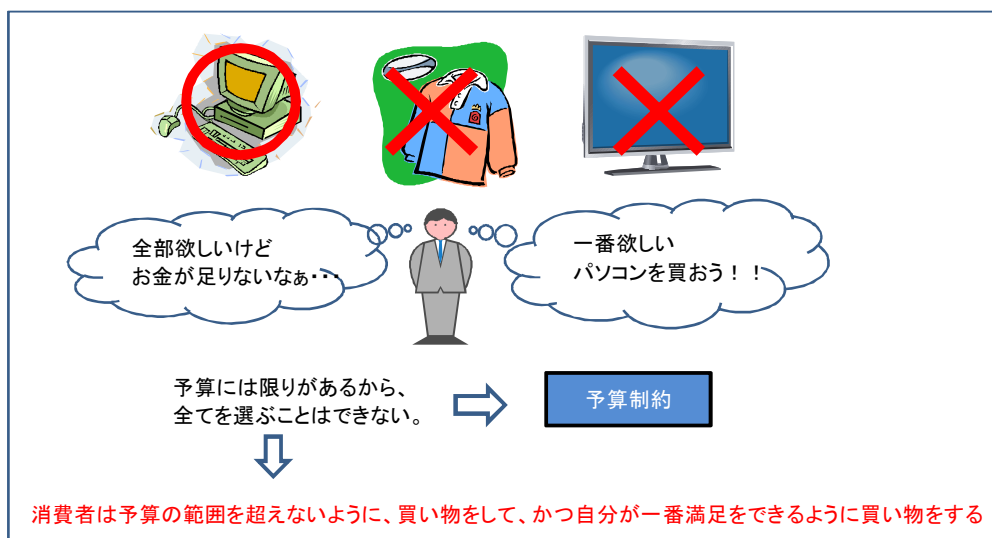
マクロ経済学とは、国民所得がどのように決まるのかを考える学問である。



企業の売上は、国民に所得として分配されるので、企業の売上が増えれば国民所得も増加し、売上が低迷すれば国民所得も減少する。

⑤予算制約

消費するには、当然予算の範囲内で収める必要があります。お金の限りがあり、つまり予算があり「全部得ることができない」「どちらか一方を選ぶしかない」ということを経済学では、「予算制約」と呼びます。



給料が上がれば当然予算の範囲は広がり、その結果消費量も増加することとなります。
また、物価が下がった時も、給料が上がるのと同様の効果があり、結果として消費量が増加することになります。

(例) 給料20万円でビールが何本買えるか？

給料20万円、ビール400円/本の場合・・・ビールを500本買うことができます。

給料20万円、ビール200円/本の場合・・・ビールを1000本買うことができます。



給料(予算)は20万円と変わっていないが、消費量が2倍に増えた。つまり、物価が下がると実質的に給料が上がるのと同じ効果があるということが出来ます。

- ・モノを消費する際には、予算制約があり、消費者は限られた予算の範囲内で自己の満足を最大に高めるように消費する。
- ・物価が下がると実質的には給料が上がるのと同様の効果があり、消費量が増える。

⑥限界

限界とは「現時点から、追加的に1単位変化させたときに、どのように変化するか」に注目することを言います。

限界と言うと「おなかいっぱいだからもう食べれない」だとか「もう飲めない」だとか上限いっぱいのことをイメージしてしまいがちですが、経済学で「限界」というと「1単位増やしたり、減らしたりすること」を意味しますので慣れるまで注意が必要です。

限界とは？



上限いっぱいの状態



現時点から1単位増やしたり、減らしたりすること

それでは「現時点から、追加的に1単位変化させたときに、どのように変化するか」とはどういうことなのでしょう。それは、例えば、初めから101を選ぶのと、100を選んでから1を追加するのでは、結果としては101で同じになるのですが、それを実現する為のメリットやコストが違うということです。

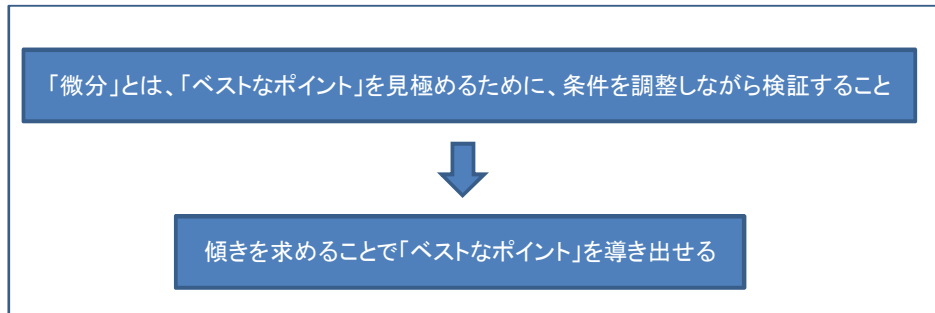


例えば、皆さんがラーメン屋さんで仕入先から100人前の材料を仕入れてきたとします。お店に帰ってきた後で「1人前追加したい」と思ったら、もう一回仕入先に行かなければならないので時間もかかりますし、ガソリン代などのコストも余計に発生してしまうので非常に大変ですね。つまり、仕入先にいる時点で1人前追加するのとお店に帰ってきた時点で1人前追加するのでは、発生するコストが違ってきます。その状況によって、1つ追加する為に発生するコストが変わって来ってしまうということです。

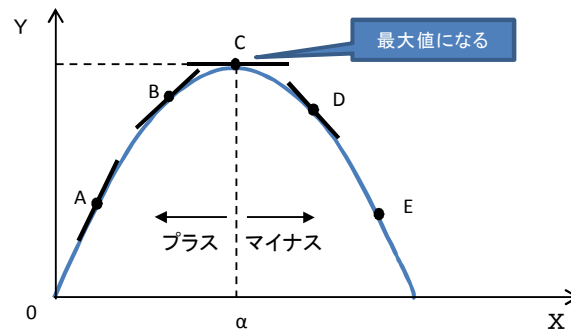
限界とは「ある時点から追加的に1単位増やすことによって、コストやメリットがどのように変化するか」に注目することを意味する。

⑦微分

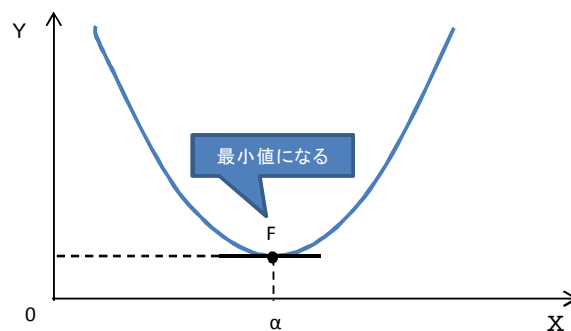
私生活でも仕事でも、判断が難しいのは「何をやるべきか」ではなく、「どのくらいやるべきか」です。例えば、長く勉強することがいいことは分かりますが、寝ずにひたすら勉強するということがベストとは必ずしも言えません。それは、勉強時間が長くなればなるほど、集中力も無くなってきますし、体調を崩し次の日に悪影響を及ぼしかねません。7時間30分勉強するのがベストなのか、8時間15分勉強するのがベストなのか、を微調整しながら「ベストなポイント」を探す方法を微分と言い、「ベストなポイント」は傾きを求めることで導くことができます。



微分のグラフは、下記のような形をしています。



「傾きがゼロ(最小)となる」=「最大値になる」



「傾きがゼロ(最小)となる」=「最小値になる」

微分とは「微調整しながらベストを探す」ことを言い、傾きがゼロ(もしくは最小)になるところで最大値または最小値になる。

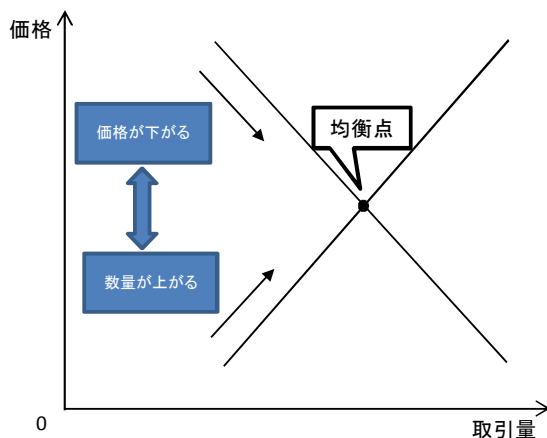
⑧均衡

「市場経済では、自然に需要と供給が一致する」ということを経済学では、「均衡」と呼んでいます。

企業は、取引量が多い時には生産量を増やしたり、価格を上げたりするなどし、逆に取引量が少ない時には生産量を減らしたり、値下げすることによって自己の利益を最大化しようと考えています。

消費者は価格が高い時は消費量を減らし、価格が安い時は消費量を増やすことで自己の利益を最大化しようとします。

このように、市場経済では、数多くの市場参加者(生産者・消費者)が集まって自由取引を行うと、やがては、「価格」や「数量」が調整され、自然に需要と供給が一致する、ある1点で落ち着くことになります。需要と供給が落ち着く1点を経済学では「均衡点」と呼んでいます。



また、最終的には「価格」と「数量」、両方が調整され、均衡点に落ち着くわけですが、「価格」と「数量」のどちらが先に調整されるかという部分で2つの考え方に分かれます。

「価格」が先に調整されて、その後に「数量」が変化するという考え方を「ワルラス流調整」と呼び、反対に「数量」が先に調整されて、その後に「価格」が変化するという考え方を「マーシャル流調整」と呼びます。

需要と供給が一致する点を「均衡点」と呼び、その過程で「価格」と「数量」のどちらが先に調整されるかという部分で、ワルラス流とマーシャル流の2つの考え方に分かれる。

(1) ワルラス流調整

(例) お弁当屋さん

市場価格 1,000円 需要量30個 供給量50個



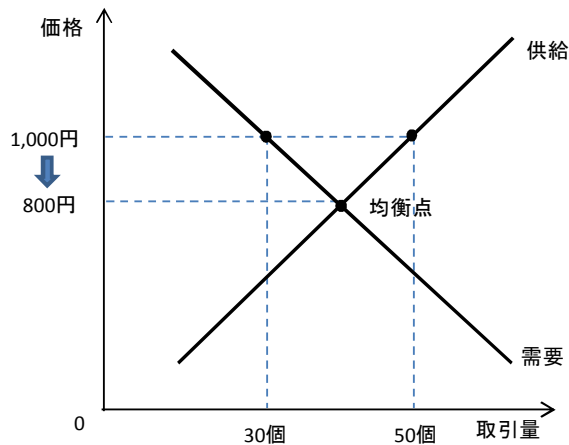
市場価格1,000円の時、20個分の在庫が生まれてしまいます。



お弁当さんは価格を下げて在庫を減らそうとします。



消費量が増え、需要と供給が均衡点で一致します。



(2) マーシャル流調整

(例) テレビ

供給量10万台 需要価格15万円 供給価格10万円



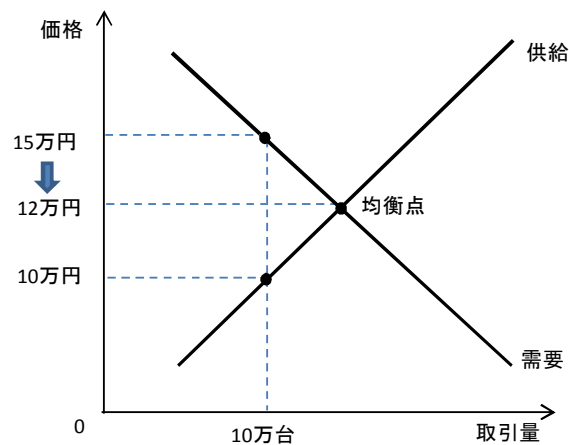
需要価格が供給価格を上回っている為、企業は想定以上の利益を出すことができます。



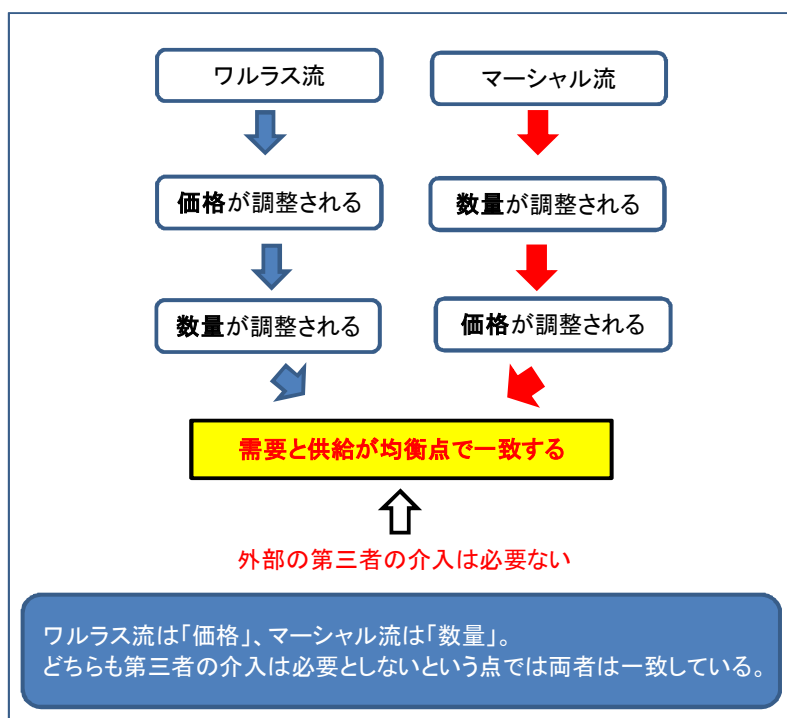
企業は更に利益を得る為、生産量を増やそうとします。



価格が下がり、需要と供給が均衡点で一致します。



※「市場経済に任せておけば、自然に需要と供給が均衡点で一致する」という点に関しては、ワルラス流調整とマーシャル流調整に違いはありません。つまり、両者とも均衡点で一致させるのに政府などの第三者の介入は必要ないという点では一致しています。



⑨国内総生産GDP(Gross Domesitic Product)

国内総生産GDPとは「一定期間内(通常は1年間)に国内で生産された付加価値の総額」を意味し、その国の経済規模や状態、景気を測る重要な指標として用いられています。売上ではなく、付加価値の合計という点に注意して下さい。

$$\text{国内総生産GDP} = \text{最終的な生産物 (売上)} - \text{中間的な投入物 (仕入)}$$

(例)

農園Aで小麦を1,000万円生産した。



Bパン工場が農園Aから小麦を1,000万円仕入れ、その小麦を使ってパンを1,500万円生産した。



スーパーCがBパン工場からパンを1,500万円仕入れ、そのパンを1,800万円販売した。

